

EUの父リヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギー： あるパイオニアの略伝と当館所蔵資料紹介

吉植 庄栄

1. はじめに

平成 27 (2015) 年, 東北大学附属図書館本館 (以下「当館」) に小松英夫氏からリヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギーの肖像画が寄託された。これはリヒャルト氏の甥の, ミハエル・クーデンホーフ＝カレルギー氏の筆によるものである。この肖像画は, 本学の法学研究科, 戸澤英典教授がリヒャルト研究の専門家であること, そして当館が EU 情報センターであること等の理由で寄託を受けたものである。

描かれているリヒャルトは, 初老時代の姿であろうか, 円熟の上に優しげな笑みを浮かべているものである。彼の右脇には彼が一生涯をかけた「パン・ヨーロッパ運動」の旗に, EU 旗と同じ 12 個の星 (スターリング) が描かれている。この肖像画は, EU 資料が配架されている当館の 2 階グローバル資料室に展示され, 毎日この部屋で黙々と学ぶ学生・院生を見守っている。



図1 リヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギーの肖像画
(甥のミハエル・クーデンホーフ＝カレルギー氏作¹⁾)

1 リヒャルトの甥ミハエル・クーデンホーフ＝カレルギー氏 (Michael Aloys Maria von Coudenhove-Kalergi, 1937-) は, リヒャルトの弟 (ハインリヒとみつの間の三男) にして日本研究者であるゲロルフの子息である。幻想的な画風で, 若年時に影響を受けた伯父リヒャルトの肖像画を複数描いている。当館に飾られているものは初老の時のものと思われるが, リヒャルトの青年時代を描いたものもある。

このリヒャルトについて、皆さんはご存知であろうか。EUの父の一人である彼は、母が日本人であるほか、戦前・戦後と日本の政財界に影響を与えており、我が

国と無関係ではない。この小論では、彼の生涯を簡単に紹介し、関係する東北大学附属図書館本館所蔵資料を紹介するものである。

2. 生い立ちと世に出るまで

リヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギー (Richard Nikolaus Eijiro Coudenhove-Kalergi, 1894-1972) は、本名をリヒャルト・ニコラウス・栄次郎・クーデンホーフ＝カレルギーという。栄次郎とあるのは、日本人の母を持ち日本で生まれたからである。日本名は、母の姓を取って青山栄次郎という。

父は、オーストリア＝ハンガリー帝国の伯爵にして駐日公使であるハインリヒ・クーデンホーフ＝カレルギー (Heinrich Coudenhove-Kalergi, 1859-1906)、母は東京牛込の油屋兼骨董屋の娘である青山みつ (1874-1941) である。彼らの次男として明治27(1894)年に日本で生まれたが、2年後父が本国に帰任するのに従い、日本を去った。クーデンホーフ＝カレルギー伯爵家の所領は、ボヘミアのロンスペルク (Ronsperg → Poběžovice 現チェコ共和国) にあり、リヒャルトはそこで育った。

クーデンホーフ＝カレルギー伯爵家は、前者のクーデンホーフ家 (ハインリヒの父の家系) が十字軍の時代にまで遡るフランドル由来の家であり、後者のカレルギー家は (ハインリヒの母の家系) 東ローマ帝国 (ギリシャ) 由来の家である。両者ともヨーロッパでも古い家系で、欧州各地に広大な所領を持っていた。

帰国10年後の1906年に父ハインリヒが急逝すると、

母みつがクーデンホーフ＝カレルギー伯爵家の所領を相続した。日本出身である「みつ」が歴史ある伯爵家を継承することについて、親戚は大反対をした。しかし彼女は裁判に勝利し、遺産を相続した。

1914年からリヒャルトは、ウィーン大学で哲学・近代史を専攻した。在学中に、第一次世界大戦が発生し母国オーストリアは敗北の上、崩壊した。多民族国家であったため各地域が独立し、小邦に分裂したのである。ロンスペルクはチェコスロバキア共和国の領土となったので、リヒャルトも国籍が変わった。

ウィーン大学在学中に、大物女優であるイダ・ローラン (Ida Roland, 1881-1951) と結婚した。リヒャルト19才、イダ34才であった。イダはかなり年上で、むしろ母みつに年齢が近かった。それだけでなく、離婚歴がありエリカという娘もいた。母みつは、この結婚を貴賤結婚として許さず、息子を勘当した。

後日、リヒャルトがパン・ヨーロッパ運動で成功すると、母の怒りも徐々に軟化していった。しかし嫁に対しては終生会わなかったという。嫁姑仲は最悪であったが、リヒャルトとイダは、イダが1951年に死ぬまで終生添い遂げることになる。

3. パン・ヨーロッパ

第一次大戦終結後の1922年、リヒャルトはドイツとオーストリアの新聞誌上で「パン・ヨーロッパ」構想を発表した。1923年には『パン・ヨーロッパ (Pan-Europa)』という単行本を出版し、この年に妻イダの資金で汎ヨーロッパ社 (Paneuropa-Verlag) を設立した。

この単行本には次のようにある。

まずヨーロッパの衰退は、文明が成熟し老いたからではなく、政治的なものであると指摘する。ヨーロッパ内でいがみ合い対立し、戦争をするから衰退するのである。その原因は狭い領域が様々な国家に分かれて

いるからで、民族ごとに国家を樹立するような政治システムに問題があるとする。ヨーロッパの青年は、問題の根源である小国分立を解消し、統一されたヨーロッパを実現することが使命である。そして大英帝国 (海外植民地を多く持つ英国は、統一ヨーロッパとは別のブロックと考えていた。) 強大になったアメリカ合衆国、ソビエト連邦、そして極東アジア (大日本帝国と中国など) に対抗していかねばならないとする。

そのヴィジョンはとても実現不可能で、荒唐無稽かもしれない。しかし、数年前までポーランドとチェコ

の独立は、夢物語とされていた。同じくロシア帝国が倒れて共産主義国家が出現することも、夢物語と考えられていた。しかしそれらは、現実起きた。ヨーロッパ統一とて多くのヨーロッパの青年が望めば、実現できるのである²。

以上のように彼の世界認識は、アメリカ合衆国、大英帝国、ソビエト連邦、極東アジアそしてヨーロッパの5ブロックからなっていた。そしてヨーロッパは他の4ブロックに比べて昔日の力を、内紛のために失いつつあると考えていた。

また彼は具体的なヨーロッパの統合も、次の様な階梯で提示している³。

- (1) ヨーロッパ会議を開催し、各国の代表が統合を検討する。
- (2) 域内紛争の解決のため、欧州裁判所を創設する。域内で相互安全保障条約を結ぶ。
- (3) 域内での関税同盟を結び、通貨統合を行い、単一経済圏を策定する。
- (4) ヨーロッパ合衆国に統合する。

これによって次のような効果があるとする。

- (1) ヨーロッパ内戦争の防止
- (2) 世界戦争に対するヨーロッパの中立
- (3) 赤いまたは白いロシアの侵略からの擁護
- (4) 軍縮の可能性
- (5) アメリカおよびイギリスの、将来は極東およびロシアの産業に対する競争能力

現在のEUの成り立ちや仕組みと比較すると、この構想は似通うところがあり、大変興味深い。実際にEU統合の過程で度々この構想と同じことが、実現している⁴。第一次世界大戦の悲惨な結果を繰り返さないため、そもそも国境を無くしてしまえば良いのである、という彼の理想主義は、時間をかけて着実に実現していると言えよう。

この単行本の初版印刷部数は少なかったものの、最初の一年で10万部が売れるというベストセラーになっ

た。各国語の翻訳も刊行され各国の政治家層を取り込み、徐々に支持者を増やした。この本には「私はパン・ヨーロッパ運動に参加します」と書かれた著者宛の手紙があり、それを出すと会員になれるという特徴があった。この手紙は、毎日多数が届くようになり、その結果、全ヨーロッパ的な規模で、運動を組織的に行う事ができるまで発展した。

また、新生オーストリア共和国政府の支援を受けることができ、1926年には第1回パン・ヨーロッパ会議をウィーンで開催することができた。このパン・ヨーロッパ運動は1927年には仏外相であったブリアン(Aristide Briand, 1862-1931)を名誉総裁に推戴し、ヨーロッパ各地の支部に於ける活動も盛んになった。

ブリアンの尽力で、この「パン・ヨーロッパ」構想は国際連盟総会での議題にもなり、ヨーロッパ合衆国への統合が総会で話し合われるほどにまで実現味を帯びてきた。これには第一次世界大戦でオーストリアと同じく敗北した、ドイツの外相シュトレゼマン(Gustav Stresemann, 1878-1929)の賛同と尽力もあり、仏独の協調が背景にあった。

以上のようにリヒャルトは青年時代に、一介の哲学博士にあるにもかかわらず、自らの思想を述べた著書をもってわずか数年で、全ヨーロッパ中に注目され、一気に時の寵児となり絶頂を極めたと言えよう。

しかしこの時の協議された内容は、第一次世界大戦後の勢力秩序、いわゆるヴェルサイユ体制を固定化するロカルノ条約の拡大版的なものであり、ヴェルサイユ体制で策定された国境や、構築された各国分立状態の打破を目指すというリヒャルトの思想とは違うものになっていた。また、ドイツ側の中心人物であるシュトレゼマンが1929年に脳卒中で急逝し、ドイツの外交方針が変わってしまった。そしてアメリカ合衆国のウォール街から始まった世界恐慌のため、各国は域内協調路線を捨て、保護主義的な方針を採り始めた。

景気が良い頃は、国際協調と経済圏の活性化が模索される空気があること、そして悲惨な世界大戦をもう繰り返さないという空気があり、欧州の統合運動であるパン・ヨーロッパ運動は好意的に支持された。しかし景気の急速な悪化から、各国が独自の生存を目指す

2 Richard Coudenhove Kalergi [著]; 鹿島守之助訳編, クーデンホーフ＝人・思想・行動; パン・ヨーロッパ, (クーデンホーフ・カレルギー全集; 1), 鹿島研究所出版会, 1970, p.37-41.

3 パン・ヨーロッパ, p.164-166.

4 内藤 徹雄, 欧州統合の提唱者, クーデンホーフ・カレルギーの思想と行動, 共栄大学研究論集, 2006, 4, p.170.

ようになり、欧州統合どころではなく、明日生きていく事に意識が切り替わっていく。その最たるものが、ドイツで1933年に起きた、アドルフ・ヒトラー (Adolf

Hitler, 1889-1945) による国家社会主義ドイツ労働者党 (Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei, 略称: NSDAP) いわゆるナチスの政権奪取である。

4. 苦闘の1930年代

1889年にドイツ国境にほどなく近いオーストリアのブラウナウで、税官吏アロイスの第四子として生まれたアドルフ・ヒトラーは、芸術家を目指すものの受験に失敗し、放浪生活をしていた。第一次世界大戦では、オーストリア国籍のままドイツ帝国の志願兵になり、戦場で40回以上戦闘を経験し、毒ガス攻撃を受け負傷し、死にかけたこともある。戦後、政治の道に進み、当時発足したばかりの国家社会主義ドイツ労働者党に入党する。持ち前の弁舌力と行動力で、党内で頭角を現した。1923年のミュンヘン一揆の失敗で投獄されたが、獄中で『わが闘争 (Mein Kampf)』を口述筆記で完成させ、1925年に刊行した。

出獄後、世界恐慌を背景に党は躍進し、1933年にヒトラーは、時のヒンデンブルグ大統領から首相に任じられ、ここにナチス政権が誕生した。直後、老齢のヒンデンブルグ大統領は死去し、ヒトラーは総統に就任した。

ナチス政権は、党の指針通りドイツの民族精神の高揚を煽るゲルマン人至上主義を掲げていた。第一次大戦の敗北と世界恐慌とによって苦渋を重ねていたドイツ国民は、この民族主義的な主張と強く同調するようになった。ヒトラーは、優秀なゲルマン民族が他の欧州の諸民族を支配するというヨーロッパ統合を考えていた。リヒャルトも模範としているアメリカ合衆国をよく見

れば、アングロサクソン系と北方ゲルマン系が中心で、他のヨーロッパ諸民族は地位が低く、有色人種は排斥されている。ヒトラーは、アメリカ等と覇権を争うには、このアメリカと同じような人種の優劣に基づいた支配が必要と考えた⁵。リヒャルトが考えたような、平等にしてそのままの統合に対して否定的なのである。

皮肉なことに両名ともヨーロッパを一つにし、他のブロックに伍していくという点では意見は同じであった。しかし目標に至る過程が、全く異なるのである。

ヒトラーはリヒャルトのことを「混血人間」「根無し草のコスモポリタニスト」と馬鹿にしていた。一方、リヒャルトも著書である『回想録』の第15章⁶に「パン・ヨーロッパ対ヒトラー」というタイトルで、その時期の対決の経緯を残している。そのように両者は思想的にも出自的 (リヒャルトは貴族、ヒトラーは役人の子息にして、兵隊上がり) にも相容れない存在であり、ヒトラーは政権掌握後、パン・ヨーロッパ主義を弾圧することになる。

1938年にドイツへのオーストリア併合が起きると、ナチスはパン・ヨーロッパ運動本部があるウィーンのホーフブルク宮殿を接収し、数多く所持していた文書類などを廃棄した。リヒャルトは弾圧を逃れるため、スイスに亡命を余儀なくされた。

5. 第二次世界大戦から戦後にかけて

1939年にドイツのポーランド侵攻で始まった第二次世界大戦は、リヒャルトをさらに苦境に陥れた。次のパン・ヨーロッパ運動の本拠地としていたフランスが1940年、ドイツに敗れ降伏すると、スイスに留まる事もできたが、いつドイツが中立を破って侵入してくるかという不安があるのと、ドイツに対する敵対運動を

しているリヒャルトをスイス政府が遇しづらいことを鑑みて、イベリア半島に脱出し、その後辛くもアメリカ合衆国に亡命がなかった。

アメリカではニューヨーク大学に身を置く傍ら、パン・ヨーロッパ運動を継続した。しかしヒトラーのナチスドイツの覇権下にあるヨーロッパ大陸という現実

5 林信吾著、青山栄次郎伝：EUの礎を築いた男、角川書店、2009.12、p.290.

6 Richard Coudenhove Kalergi[著];鹿島守之助訳編、回想録、(クーデンホーフ・カレルギー全集;7)、鹿島研究所出版会、1970、p.207-223.

衰亡しているパン・ヨーロッパ運動自体を、さらに現実味のないものとしていた。この当時のアメリカでは、「統一されたヨーロッパ」とは、「ヒトラー支配下のヨーロッパ」と同じことであった。それを「パン・ヨーロッパ運動」が覆す、とは到底思われていなかったのである。

リヒャルトは、ヒトラー側に留まったパン・ヨーロッパ主義者の進言をヒトラーが聞き入れ、ムッソリーニのイタリア、フランス降伏後のペタン元帥によるヴィシー政権、そして独裁者フランコのスペインらが協力して、ヨーロッパ統合政府を樹立することを非常に恐れていた。この頃まだソ連はドイツと不可侵条約を結んでいる友好国であり、イギリスのみがドイツの猛攻を受けつつもヨーロッパで孤軍奮闘をしていた⁷。そのイギリスがドイツと和平を結ぶか、降伏するようなことになり、アメリカが動かなければ、リヒャルトが描いたヨーロッパ統一は、ヒトラーによって違う形で完遂されてしまうのである。そのような中、母みつが亡くなったという連絡がリヒャルトのもとに届いた。

しかし1941年6月に独ソ戦がはじまり、同年12月、日本がハワイの真珠湾を攻撃して太平洋戦争がはじまると、そのような懸念は払しょくされた。アメリカの空気は一変したのである。その結果、アメリカが最終的に勝利し、ヨーロッパを解放した後は、どのようにすべきか、という議論が芽生えるようになった。このような背景で、アメリカでのパン・ヨーロッパ運動が拡大し始めたのである。

ドイツと日本の劣勢が明らかになってきた1943年3月にはニューヨークで第5回パン・ヨーロッパ会議が開催された。この会議にはアメリカに居るヨーロッパ各国の元国務大臣や学者、名士が大いに集い、関税問題や統合政府の憲法、法律、経済、財政問題など幅広い分野が協議された。

賛同者も増える一方、しかし時の大統領ルーズベルト（Franklin Delano Roosevelt, 1882-1945）には会見を断られたという。ルーズベルトはリヒャルトを嫌っていたという説もある。1945年4月にこのルーズベルトが急死する。

そのような中、1945年5月にベルリンは東西からの攻撃に陥落し、ヒトラーは自殺してナチスドイツは滅亡した。リヒャルトを妨げる勢力が滅亡したことになる。つまり戦後のヨーロッパで、パン・ヨーロッパ運

動を再興する機会が巡ってきたのである。

次のアメリカ大統領は、トルーマン（Harry S. Truman, 1884-1972）が就任した。彼は、リヒャルトのヨーロッパ統合思想を高く評価していた。1945年12月初めの月刊誌には、ヨーロッパ統合構想に対するトルーマンの賛意を紹介する記事が、掲載された。そしてトルーマンは、パン・ヨーロッパ運動を、アメリカ合衆国の政策に取り上げたのである。またイギリス首相チャーチル（Sir Winston Leonard Spencer-Churchill, 1874-1965）は1946年の演説で、パン・ヨーロッパ運動にふれ、ヨーロッパの人々にその運動を思い起こさせた。

1946年にリヒャルトは、ヨーロッパに戻った。トルーマンとチャーチルに支持されたパン・ヨーロッパ運動は二度目の大戦で荒廃したヨーロッパを再び統合に導くと思われた。

しかし、チャーチルと具体的な統合の形について意見が異なり、彼とその甥であるダンカン・サンズにヨーロッパ統合運動の主導権を奪取され、統一ヨーロッパ運動（United European Movement）をイギリスで結成されてしまった。リヒャルトとチャーチル、ダンカン・サンズが対立した理由は、彼らがイギリスの国益を最優先とし、そのためのヨーロッパ統合運動と考えていたからである。リヒャルトの戦後の活動が、このように主導権を奪われるというような戦間期ほど華々しい求心力を持ちえなかったのは、第二次世界大戦がはじまるや、ヨーロッパを脱出し、早々に米国へ逃げたことが原因である⁸、という意見もある。

彼は落胆しつつもヨーロッパ統合の実現に向け、実際の政治家である各国の同志議員を100名以上集めて1947年、スイスのグスタードでヨーロッパ議員連盟を立ち上げた。統合理念の宣伝は、既に長年の活動で一定の成果をおさめており、次のステップとして、各国国会における統合審議を促進することが重要、とリヒャルトは考え、そのため各国の議員を集めたのである。

しかし、未だに困難は継続していた。チャーチルとダンカン・サンズは、リヒャルトや彼が創立したヨーロッパ議員連盟に知らせずに、ヨーロッパ会議を開催しようとするなど、対立が続いていた。会議直前に招待状を送付することや、パン・ヨーロッパ旗を掲揚しない、などという嫌がらせがあったものの、リヒャルトは1948年にオランダのハーグにて開催されたヨーロ

7 回想録、p.269.

8 青山栄次郎伝、p.293.

パ会議に参加することができた。この会議では、各国議会が選出した議員によるヨーロッパ議会を開設することが決議された。

やがてチャーチルとの妥協の結果、1949年には欧州評議会（Council of Europe）がフランスのストラスブールに樹立された。当会議はあくまでも諮問機関であり、実際の権力を持つことができなかったが、リヒャルト本人はパン・ヨーロッパ運動の基盤がやっと実現したように感じたようである。その時のリヒャルトの感慨として、次の様な言葉を残している。

イーデル（筆者注 妻イダ・ローランのこと）と私にとっては、四分の一世紀にわたるわれわれの努力がついに成功したことを、いくら喜んで喜び切れるものではなかった。ヨーロッパはその歴史上初めて、地理上の概念のみならず、政治上の概念となったのである⁹。

この欧州評議会は後日リヒャルトの提案を採択し、ベートーベンの交響曲第9番第4楽章、いわゆる『歓喜の歌』を欧州の歌と定めている。

6. 冷戦時代と晩年

リヒャルトが苦闘している間に、彼とは別に、現在のEUに繋がる動きが現れる。産業・経済的な面でのフランス、ドイツの統合である。

両国の戦争原因の大きなものの一つに両国間に跨る石炭採掘地帯の争奪という問題があった。しかしこの地域の共同管理を、ジャン・モネ（Jean Monnet, 1888-1979）の提唱を受け、フランス外相のロベール・シューマン（Robert Schuman, 1886-1963）が、1950年5月9日¹⁰に「シューマン・プラン」として宣言した。

以降ヨーロッパの統合運動は、このシューマン・プランを基軸に進んで行く。これは欧州石炭鉄鋼共同体（ECSC）に発展し、続いて1958年の欧州経済共同体（EEC）、欧州原子力共同体（EURATOM）へと繋がっていった。

現在、EUの父といえはこのモネやシューマンの方が有名である。またヨーロッパ統合の歴史は、リヒャルトのパン・ヨーロッパ運動ではなく、このシューマン・プランをもって始まりとする記述が多い。

リヒャルトにも区切りの時期が来ていた。この1950年に、長年のヨーロッパ統合運動の功績を讃えてドイ

ツのアーヘン市からカール大帝（Charlemagne : Karl der Große, 768-814）¹¹を記念したシャルルマーニュ国際賞を受賞する栄誉を受けた。リヒャルトは歴史の主舞台から降り、過去の人になりつつあった。時代は、実際に統合を進める政治家・実業家が主役になる時代へと変わったのである。そのような中、1951年に妻のイダを亡くした。

その後のリヒャルトは、さらに具体的なヨーロッパ統合に向けて、活動を継続はしていた。その一環で個人的なフランス大統領であるシャルル・ド・ゴール（Charles André Joseph Pierre-Marie de Gaulle, 1890-1970）に接近するが、しかし成果はあまり無かった。

一方生まれ故郷である日本へ、おおよそ70年ぶりとなる昭和42（1967）年に再訪し、熱烈な歓迎を受けるのもこの時期である。昭和45（1970）年には創価学会の招きで日本に再々訪する。

リヒャルトは3回ノーベル平和賞候補にも推されたが、結局受賞することができず、1972年7月にスイスで死去した。享年77歳であった。

9 回想録 . p.342.

10 この日は、EUの創立記念日、いわゆる「ヨーロッパ・デー」とされている。

11 9世紀のカロリング朝フランク王国の王であり、800年にローマ法王からローマ皇帝に加冠される。首都はアーヘンで、現フランス、ドイツ、イタリアを中心とするヨーロッパの広範囲を支配した。このため、ヨーロッパ統合の象徴と見なされる。

7. 日本への影響

リヒャルトは東京で生まれたが、1896年、彼が2歳の時に家族が日本を離れてから1967年の再来日まで、彼が日本の土を踏むことはなかった。一方、彼に感銘を受けた日本人は少なくない。

7.1 鹿島守之助 (1896-1975)

鹿島建設「中興の祖」と呼ばれる。参議院議員、北海道開発庁長官をも務めた。兵庫県揖保郡の豪農永富家に生まれた守之助は、外交官となり、1922年ドイツに赴任した際にリヒャルトに出会う。

彼のパン・ヨーロッパ運動に感銘を受けた彼は、「汎アジア主義」を提唱した。先代の会長に見込まれて婿養子となり、鹿島組（現在の鹿島建設）を継いだ彼は、外交官を退官後、鹿島の経営に辣腕をふるう傍ら、リヒャルトの著作の翻訳活動や思想に即した活動を行った。

7.2 鳩山一郎 (1883-1959)

1954年から1956年まで第52-54代内閣総理大臣を

務める。彼はリヒャルトの著作 *The Totalitarian State against Man*¹² を日本語に翻訳した。1952年に『自由と人生』というタイトルで刊行されたこの作品で彼は、“Fraternity”を「友愛」と訳している。鳩山はその後この「友愛」思想の普及につとめ、鳩山家の現在に至っている。

リヒャルトは、これらの人々との親交の中で、日本に帰郷した際に、第1回鹿島平和賞（昭和42.10）を授与され、NHKの番組において当時の前田会長との座談会を行い、広島原爆慰霊碑参拝を行う等の行動を行った。また、同年昭和天皇に謁見し、勲一等瑞宝章も受勲している。母、青山みつは、明治天皇の皇后、昭憲皇后に渡欧前謁見し、親しく言葉をかけられたというが、二代続けての栄誉であった。

8. 平成27年度における当館での関連活動

当館は昭和58（1983）年からEU情報センターの指定を受けており、5月9日のヨーロッパデーにちなんで平成14（2002）年からほぼ毎年5～6月に日EUフレンドシップウィーク展示を開催している。

平成27（2015）年度は肖像画寄託をきっかけとし、5月29日から6月30日まで日EUフレンドシップウィーク展示「EUの父“リヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギー”」を開催した。リヒャルトの生涯や日本との関係、そして母みつといった家族の紹介のパネル展示をするほか、EUの今の記事紹介や、全問正解すると様々なEUグッズが景品として貰えるクイズも行った。会期中、本学学生や教員のみならず学外からの300人近い観覧者がこのクイズに挑戦した。またリヒャルトの著作を手にとって実際に読むことができるコーナーも設置された。当展示に寄せられた感想でも、日本人を母に持つリヒャルトが、ヨーロッパ統合の淵源であることをはじめて知り、素直に驚いた、というものが多く



図2 グローバル資料室の肖像画を背景にした戸澤英典教授（左）と寄託者の小松氏（右）

12 *Totaler Staat, totaler Mensch*, 1937. の英訳である。この原典での「友愛」にあたる言葉は“Brüderlichkeit”である。

見られた。

当展示の監修は、肖像画寄託の一端を担った戸澤英典教授が勤めた。平成27年6月22日(月)にはこの戸澤教授による記念講演会「クーデンホーフ＝カレルギーの劇的な生涯と後世への影響－ヨーロッパと日本

をつないで－」が開催された。ロシアで発見された資料に基づく最新の研究成果を踏まえて、リヒャルトの波乱万丈な一生が紹介された。当記念講演会では、肖像画の寄託者へ、植木俊哉附属図書館長から感謝状が贈られるセレモニーも併せて開催された。

9. 東北大学でリヒャルトの思想に触れる

リヒャルトについて学ぶには、最初に戸澤英典教授が運営しているウェブサイトを読むことをお勧めする。

・戸澤英典, RCK通信. <<http://www.law.tohoku.ac.jp/~tozawa/RCK%20HP/>>



図3 RCK通信

また、リヒャルトを含めたヨーロッパの統合の歴史を知るには次の2冊がお勧めである。

・遠藤乾編, ヨーロッパ統合史＝A history of European integration. 名古屋大学出版会, 2014, x, 388p.

所在：本館2F学閲 請求記号：GG151/031 所蔵ID：00140138641

・同編, 原典ヨーロッパ統合史：史料と解説＝A documentary history of European integration: text & commentaries. 増補版, 名古屋大学出版会, 2008, xxi, 778p.

所在：本館書庫 請求記号：GG151/027 所蔵ID：00080165762

当館にはリヒャルトに関する資料や彼自身の著作が、複数所蔵されている。以下、入門書・伝記、自著(翻訳)、自著(原著)の順で紹介する。

9.1 入門書・伝記

(1) 北野英明著, クーデンホーフ・カレルギー伯(希望コミックス, 9). 潮出版社, 1971.6, 226p.

所在：本館グローバルEU 請求記号：GK423/019 所蔵ID：00150098835

漫画版, リヒャルトの青年時代までの記である。父ハインリヒと母みつのなれそめから始まり, ロンスペルクでの人間形成期, 父ハインリヒの急逝から母みつの孤独な戦い, そしてリヒャルトがパン・ヨーロッパ思想を打ち出すまでを描いている。

後半はイギリスのヴィクトリア朝期の首相であったウィリアム・グラッドストーン(William Ewart Gladstone, 1809-1898)の学生時代を描く「グラッドストーン」が収録されている。

(2) 林信吾著, 青山栄次郎伝：EUの礎を築いた男. 角川書店, 2009.12, 316p.

所在：本館2F学閲 請求記号：GK423/013 所蔵ID：00100126940

リヒャルトの日本名, 青山栄次郎をタイトルに冠した伝記である。リヒャルトの伝記のみならず, 当時の世界情勢や主要人物の説明が充実しており, リヒャルト本人がいかに複雑な時代を生き, 活躍してきたかがよく分かる作品である。特に同時代の対照的な政治家であるアドルフ・ヒトラーの伝記にも大きく紙幅を割いており, パラレルな構造になっている。

9.2 リヒャルトの著作(翻訳)

(1) 鹿島守之助訳編, クーデンホーフ・カレルギー全集 所在：本館書庫 請求記号：US21/075

この全集の表紙には, パン・ヨーロッパ運動のシンボルである, 黄金色の太陽と赤十字が描かれている。全集1 クーデンホーフ＝人・思想・行動; パン・ヨー

ロッパ. 所蔵 ID : 01840804508

全集2 ヨーロッパ国民; ヨーロッパの統合; ヨーロッパは統合しなければならない; ヨーロッパにおける女性の使命. 所蔵 ID : 01840804516

全集3 実践的理想主義; 倫理と超倫理; 人生の戒律. 所蔵 ID : 01840804524

全集4 物質主義からの離脱; 技術による革命. 所蔵 ID : 01840804532

全集5 ヨーロッパの三つの魂; 悲惨なきヨーロッパ; ゼントルマン. 所蔵 ID : 01840804541

全集6 自由と人生; 友愛の世界革命; 戦争から平和へ. 所蔵 ID : 01840804559

全集7 回想録. 所蔵 ID : 01840804567



図4 回想録

全集8 第一回鹿島平和賞受賞記録; 美の国. 所蔵 ID : 01840804575

全集9 世界的勢力としてのヨーロッパ; 世界平和への正しい道; 日本は大陸ほか. 所蔵 ID : 01840804583

(2) クーデンホーフ [著]; 永富守之助譯. 汎ヨーロッパ. (国際聯盟協會パンフレット; 第70輯). 国際聯盟協會, 1927.4, 201 p.

所在: 本館書庫旧片平 請求記号: VIC10/ク2
所蔵 ID : 01600874155

リヒャルトの代表作“Pan-Europa”の訳本の初版である。鹿島建設の鹿島家に婿養子に入る前の守之助(当時は永富姓)の訳によるものである。



図5 汎ヨーロッパ

(3) クーデンホーフ・カレルギー著; 鳩山一郎訳. 自由と人生. 乾元社, 1953.1, 329 p.

所在: 本館書庫旧片平 請求記号: VIB1/カ24
所蔵 ID : 01600642436 ほか複本5冊

第52-54代内閣総理大臣を務めた鳩山一郎が訳したものである。昭和21(1946)年から昭和26(1951)年の間、公職追放処分となった時代に翻訳された。当館では6冊の同書を保存しており、当時いかに人気があった(或いは選書担当者に必要と認められた)かが分かる。

9.3 リヒャルトの著作(原著)

・R.N. Coudenhove-Kalergi. Europa Erwacht! Paneuropa-Verlag, c1934, 295 p.

所在: 本館書庫 BF1 大型コレ社会主義 請求記号: A87/1 所蔵 ID : 00870162746

当館で唯一所蔵するリヒャルトの原著である。本文はドイツ語である。タイトルは「ヨーロッパよ 目覚めよ!」とでも言おうか。



図6 Europa Erwacht!

10. おわりに

リヒャルトが描いたヨーロッパ統合という理想は、生前には実現しなかった。しかし、リヒャルトの理想は、人々を引きつける何かしらがあつた。80年弱の人生で、何度も政治運動を起こし、舞台上上がってきたことがその証左である。思想を具現化する仕事は、ほかの政治家や実業家といった人々に結果頼る事になったが、リヒャルトは、いわばパイオニア・開拓者としての仕事を果たしたと言えよう。肖像画となった彼が見下ろす本学の学生・院生にも将来、新しい分野の開拓や、世紀の発見といった大きな仕事をしてもらいたいと、一職員としては考える。

本稿及びリヒャルトの展示など一連の活動について、

本文に何度も紹介したが、法学研究科の戸澤英典教授に多大なるご教示を頂いた。また、戸澤教授の研究成果から相当な個所を引用および参考にさせて頂いた。この場を借りて御礼申し上げる。

また本稿を書くきっかけである平成27年度EU展の企画と準備に尽力頂いた、情報サービス課村上康子、福井ひとみ、須田洋子、西村美雪（敬称略）の四氏にも感謝申し上げて筆を置きたい。

（よしうえ しょうえい、附属図書館情報サービス課
参考調査係）

【参考文献】

- 1) 遠藤乾編. ヨーロッパ統合史 = A history of European integration. 増補版, 名古屋大学出版会, 2014, x, 388p.
- 2) 同編. 原典ヨーロッパ統合史: 史料と解説 = A documentary history of European integration: text & commentaries. 名古屋大学出版会, 2008, xxi, 778p.
- 3) 鹿島守之助訳編. クーデンホーフ = 人・思想・行動; パン・ヨーロッパ. (クーデンホーフ・カレルギー全集; 1). 鹿島研究所出版会, 1970, 263 p.
- 4) 同. 回想録. (クーデンホーフ・カレルギー全集; 7). 鹿島研究所出版会, 1970, 393 p.
- 5) 北野英明著. クーデンホーフ・カレルギー伯(希望コミックス,
- 9). 潮出版社, 1971.6, 226 p.
- 6) 小島健. 戦間期における欧州統合構想. 経済学季報. 2006, 56 (1/2), p.25-62.
- 7) 田中文憲. ヨーロッパ統合の立役者たち (1) リヒャルト・クーデンホーフ = カレルギー. 奈良大学紀要. 2004, 32, p.1-18.
- 8) 戸澤英典. RCK通信. <http://www.law.tohoku.ac.jp/~tozawa/RCK%20HP/>, (参照 2015-12-22)
- 9) 内藤徹雄. 欧州統合の提唱者, クーデンホーフ・カレルギーの思想と行動. 共栄大学研究論集. 2006, 4, p.163-173.
- 10) 林信吾著. 青山栄次郎伝: EUの礎を築いた男. 角川書店, 2009.12, 316 p.